「モノ」との対話によって生成される遊びと性質への気づきの変容
―新聞紙ワークに重ねて見える幼児の思考と感覚―

阪本 満

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要　第８号

令和８年（2026）3月

「モノ」との対話によって生成される遊びと性質への気づきの変容
――新聞紙ワークに重ねて見える幼児の思考と感覚――

阪本　満
（京都教育大学非常勤講師）

Transformation of Play and Awareness of Properties Through Dialogue with Objects: Children's Thinking and Sensibility Reflected in a Newspaper Workshop

Mitsuru SAKAMOTO

2025 年 9 月 19 日受理

抄録：本研究は，領域「環境」を学ぶ大学生を対象に，モノとのかかわりによって生起する〈行為―性質の気づき〉を明らかにし，それによる教育的意義を検討した。具体的には受講学生に体験型ワークを実施し，受講学生のワーク内容の記述を KH Coder で分析し，さらに幼児教育専攻以外の学生におけるワーク後の気づき・感想を質的データ分析法を基に検討した。結果，幼児期のモノへのかかわりの特徴としての行為と性質・仕組みへの気づきと，自分なりの法則の立ち上がりを体感していることが確認された。またワークによる体験は幼児教育の学び方を身体化し，関心を高め，他校種における「主体的・対話的で深い学び」や授業設計に資する示唆を与えた。

キーワード：幼児期の遊び，アフォーダンス，物とのかかわり，幼児教育と学校教育，テキストマイニング（KH Coder）

Ⅰ．問題と目的

１．学生の実体験不足と遊び経験の重要性

近年，保育者・学校教員の質の向上に向けて様々な政策が進み，それに伴って保育者養成課程・教職課程等の見直しも図られ（文部科学省保育士養成課程等検討会，2017；文部科学省教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会，2017），即戦力を備えた保育者・学校教員の育成に向けてより実践に即した授業内容の充実が養成校に求められている。その背景の一つに，昨今の学生の実体験の不足があげられる。例えば今井ら(2015)や細井ら(2007)は，保育者を志す学生自身の，遊び等の体験不足を指摘している。一方で，学生自身の遊びなどの実体験の蓄積が，自身の就職後の実践・心理面に好影響を及ぼすことも示されている。例えば，遊びの経験が，仕事の効力感を高める可能性を示した渡部ら(2004)，保育者自身が遊びの面白さを感じることが子どもの「面白い」という心の動きを誘発しうるという加藤(1993)などがそれにあたる。この点は，「生活の中で自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して，この時期にふさわしい生活を営むために必要なことが培われる」（文部科学省，2018）ことを旨とする幼児教育に携わる上では欠かせないものである。したがって，学生が自ら遊び等の実経験を重ね，その楽しさと意義を身体的に実感することは，子ども理解と効果的実践の基盤形成を支えるものと考えられる。この課題意識は保育者を志す学生にとどまらず，幼児教育の理解を必要とする(文部科学省初等中等教育局幼児教育課，2025)小学校・中学校・高等学校・特別支援の教員志望者にも共有されるべきである。

２．幼児とモノとのかかわりについて

先述したように，幼児教育は本来，幼児の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して行われるものである。そこでは「周囲の環境との相互関係」（文部科学省，2018）が不可欠である。領域「環境」は，身近な環境との関わりに関する領域であり，それによると，身近な環境に対して「初めは，感触を試」す働きかけから，

「物に触発されて遊びを生み出」す過程を通して「物の性質や仕組み」に気付くことが示されている(文部科学省，2018)。そのプロセスには環境が行為する可能性を提供するというアフォーダンス（Gibson, 2003）も関与しているだろう。さらに保育者は「その意味や操作の仕方に関心をもち，物事の法則性に気付き，自分なりに考えることができるようになる過程」(文部科学省，2018)に配慮することが求められる。とりわけ幼児期における法則性の気づきとは，科学的に正しい法則の発見を目的とするのではなく，「その幼児なりに規則性を見いだそうとする態度を育てることが大切」(文部科学省，2018)とされている。つまり，大人は身近な周囲のモノ（本稿において，幼児が日常の環境の中で関わり得る，素材・自然物・道具などの物理的対象を「モノ」とカタカナ表記する）に対する知識や決められた使い方を身につけているため，そのように扱う(そのようにしか扱えない)のだが，子どもは，五感でモノと対話し，固定概念に縛られないモノの扱い方や遊び方，ひいては想像もつかないような法則性を思い付くかもしれないのである。以上の観点からすれば，幼児とモノとのかかわりのプロセスを理論的に提示するだけで，学生の理解に結びつくのだろうか。ましてや幼児期の「法則性への気づき」が科学的に裏付けられた正否の同定ではなく，遊びを通しての「幼児なりの規則性を見いだそうとする態度」であるならば，遊び体験の乏しい学生が口頭による説明のみで腑に落ちるのだろうか。必要なのは，身近なモノが何を触発し，そこからいかなる「自分なりの法則性」が立ち上がるのかを，学生自身が五感を介したモノとの相互作用の中で身体的に体感し，理論としてではなく身体化された理解として獲得することである。そのために体験型のワークを授業に取り入れることが効果的だと考える。

３．研究の目的

本研究では，領域「環境」の内容を受講する学生を対象に，モノとかかわる体験型のワークにおいて生起する行為及びモノの性質・仕組みへの気づきを明らかにし，その体験に基づく学びから導かれる教育的意義を検討することを目的とした。

Ⅱ．研究の方法

１．研究の方法

本研究の目的に適合する体験型ワークとして「身近なモノと出会おう～新聞紙～」(以後，ワークと記載)を実施する。ワークでは，学生が幼児になったつもりでモノとの相互作用を起こし，そこから行為が触発され，モノの性質への気づきが促進されることを意図した。そのため，身近で触れやすく，可塑性や応答性が高く，多様な行為や遊びが生起されやすそうな素材として新聞紙を選定した。ワークの概要は図１に示す。また，ワークシートを用意し(概要は図２参照)，ワークを通して「自分が新聞紙に（新聞紙と）したこと」と「気づいた（いつの間にか利用していた）性質・仕組み／気づいて意図的に利用した性質・仕組み」（以下，ワーク内容と記載）とを対応させて表形式で記入できるようにした。併せてワーク中の気づき及び感想を自由記述できるようにした。

ワーク内容の分析には，テキストマイニングソフト KHCoder(ver.3)の共起ネットワークを用いた。テキストマイニングとは，「自由記述のような文書データを定量的な方法で分析すること」（牛澤，2018）であり，恣意的になりやすい手作業の判読を抑制しつつ，結果を視覚化して提示できる利点がある。その中で，共起ネットワークは頻繁に一緒に使用される語同士を線で結び表示するものであり，学生が行った行為と気づいた性質・仕組みとの関係をそこから探ることとした。

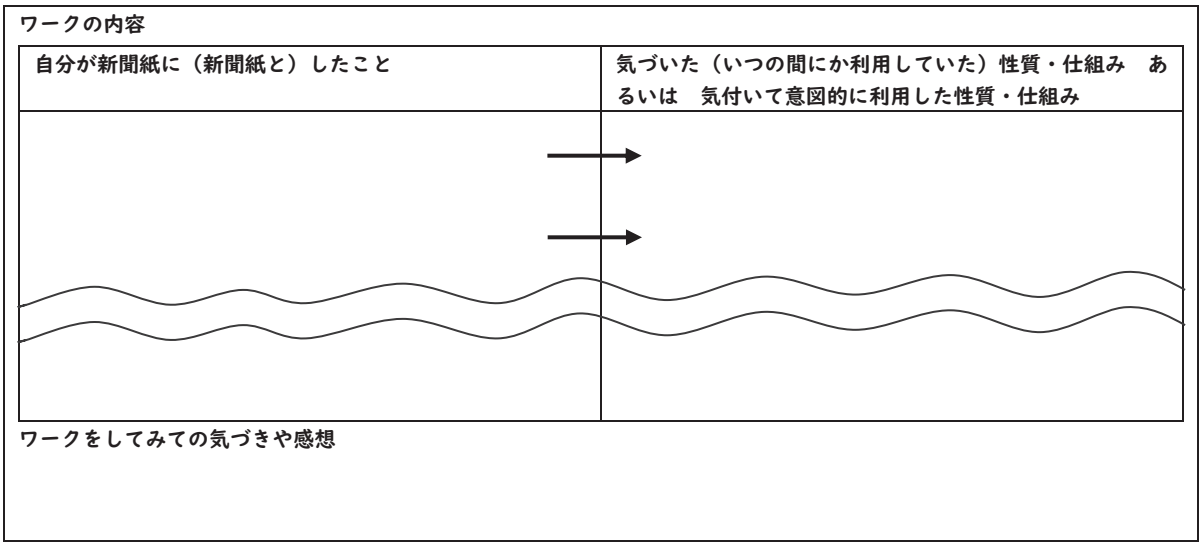
また，気づき・感想の自由記述については，佐藤郁哉(2008)の質的データ分析法を参考にした。これにより，個々の学生の体験に即した意味づけを保持しつつ，共通するパターンやテーマを抽出し，得られた知見を本研究の目的と結び付けて，教育的意義として位置付けることを目指した。

図１．体験型ワーク「身近なモノと出会おう～新聞紙～」

（１）　学生一人につき新聞紙見開き１枚（546 ㎜×841 ㎜）を配る。
（２）　「『幼児が初めて新聞紙と出会う』気持ちになって新聞紙と対話的・応答的にかかわろう」と告げる。
（３）　自由に新聞とかかわる時間を設ける。

（4）　ワークの後半には，追加の新聞紙やセロハンテープが必要な場合は使用できることを告げる。

図２．ワークシートの概要



２．対象

本研究の対象は，京都教育大学において科目「幼児と環境」を履修する学生である。先述したように，直接的・具体的な体験を通して営まれる幼児教育への理解は，小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教員志望者にも共有されるべきであり，他校種志望の学生が本研究で何を体感したのかを明らかにすることに本研究の意義があると考える。この観点から，テキストマイニング(KHCoder)によるワーク内容の分析については一定以上のサンプリングを得るために履修学生全員を対象としたものの，ワーク終了後の感想や気づき（自由記述）の分析に関しては，幼児教育専攻以外（国語領域専攻・理科領域専攻・発達障害教育専攻など）の学生に絞り実施した。

３．手続き

手続きは次の順で行った。まず，「幼児と環境」の授業内において，幼稚園教育要領解説における領域「環境」の「内容（2)」および「内容の取扱い（1)」，ならびにアフォーダンス理論の概要について講義し，幼児がモノと出会い，相互作用を通じて仕組みや性質への理解を深めていくプロセスを提示した。次に，図 1 に示す工程に従ってワークを実施し，ワークシートへの記録を収集した。その後，ワークシートの記述を基に分析を行った。

分析について，回答者が記入した「新聞紙に（新聞紙と）したこと」と，それに対応する「気づいた（いつの間にか利用していた）性質・仕組み／気づいて意図的に利用した性質・仕組み」を一文の単位に統合し，表記ゆれの修正（用語の統一，漢字・かなの揺れの是正等）を施した。修正後のテキストを KH Coder（ver.3）に読み込み，関係（edge）の種類を語－語，描画する共起関係（edge）の選択を上位 35 に設定した共起ネットワークにより分析した。

自由記述の分析については，ワーク後の気づきや感想の記述を対象とし，佐藤(2008)の質的データ分析法を参照した。具体的には文章の意味上のまとまり毎に切片化し，各切片の意味内容を端的に表す小ラベルを付与し，小ラベル同士の意味が近いものを大ラベルとしてカテゴリー化した。なお，恣意性が含まれないよう，ラベル名は各切片の内容に限定し，ワークによる気づきや感想とは明らかに無関係と思われる記述については，切片化の段階で除外した。さらにに大ラベルにまとめる際は小ラベルの意味のまとまりとして齟齬がないか，アンケート用紙と何度も往還しながら整理した。

４．倫理的配慮

本研究は授業内で得られた記述を研究目的で二次利用するものであり，対象学生に対して，データの利用範囲，

紀要掲載の可能性，プライバシー保護，任意参加であることと，参加を拒否・撤回しても不利益が一切生じないことを口頭で説明し，同意を得た。

Ⅲ．結果と考察

ワークシート(図２参照)は授業参加学生 34 人，そのうち，幼児教育専攻以外の学生 16 人に配布し，有効回答数は 34，そのうち幼児教育専攻以外の学生の回答数 16（教育学専攻 1，発達障害教育専攻 4，国語領域専攻 5，理科領域専攻 2，美術領域専攻 1，家庭領域専攻 2，体育領域専攻 1）だった。授業参加学生全員によるワークの内容の記述について，KHCorder（ver.3）の共起ネットワークによる分析結果を図３に示した。また，幼児教育専攻以外の学生のワークシートにおけるワーク後の自由記述について，質的データ分析による結果を表１に示した。なお，表内のラベル名については，大ラベルをゴシック体，小ラベルを明朝体表記とした。さらに，本文中では共起ネットワークの各グループの概念を〖　　〗，質的データ分析による大ラベルを【　　】，小ラベルを［　　］，また記述の原文を「　　」で示すこととした。

１．結果の概要

共起ネットワークの結果を図３に示す。出現数が多い語ほど大きい円で描かれ，円と円のつながりを線とその係数で表示している。８つのまとまり（グループ）が抽出され，それぞれ①～⑧の番号を付与した。また，質的データ分析を行った表１において，ワーク後の気づきや感想についての学生の自由記述を分析した結果，【遊びの特徴を身体で理解】【身体によるモノとの対話】【快の情動による遊びの駆動】【モノとしての新聞紙】【保育現場との架橋】【学校教育と幼児教育との比較】の６つの大ラベルとその大ラベルを構成する 18 の小ラベルが抽出された。それぞれの特徴を見出し，研究の目的に沿って考察をする。

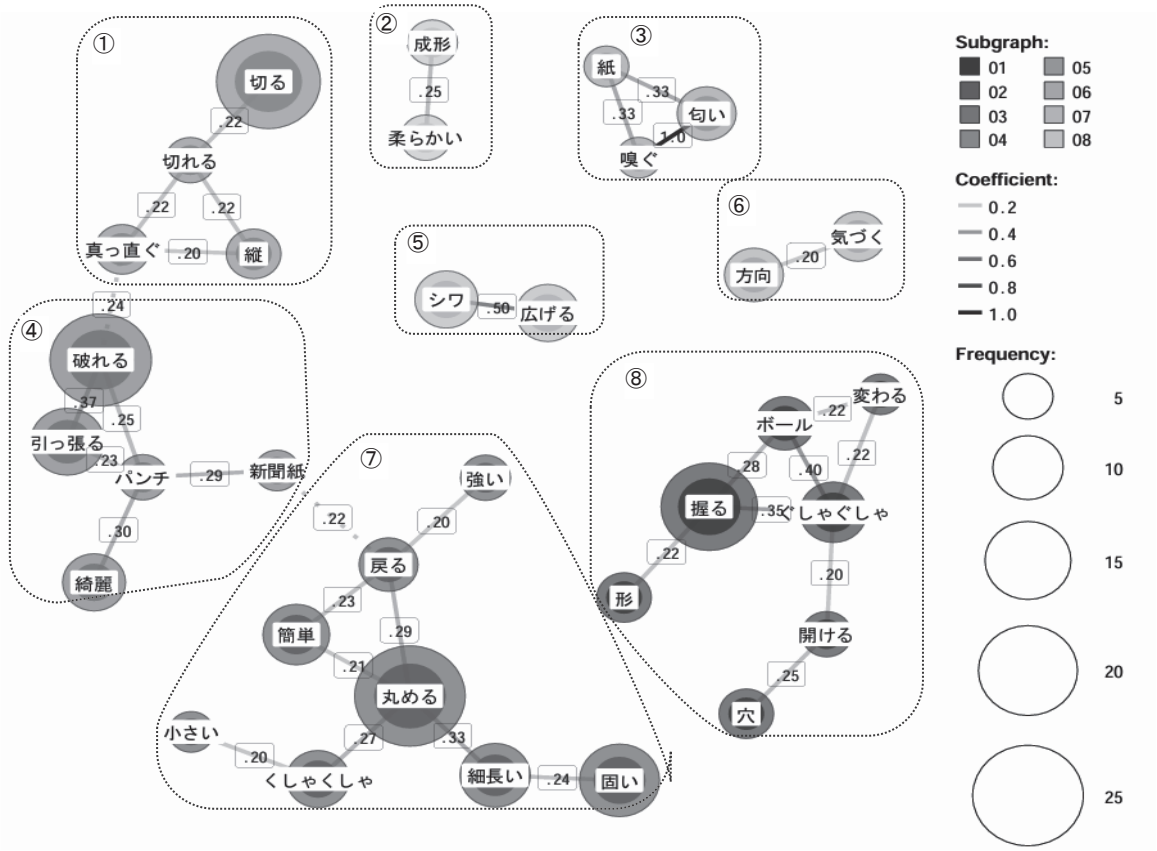


図３．学生が新聞紙にしたこと及び性質や仕組みへの気づき

表１．ワーク後の気づきや感想から抽出されたラベル一覧

ラベル名	切片数	具体例
遊びの特徴を身体で理解	**22**	
遊びや目的の変化・連鎖	12	初めはそんなに何かを作ろうと思ってしてなかったことでも／破ると，破れるという性質に気付き，それから，ラーメンや髪の毛という破る遊びに転じ／マフラー→ドーナツ→武器というようにどんどん変化
他者との相互作用	4	隣でやっているのを見て「私もやってみたい」と思う／自分がビリビリにしてできた形（お面）と，隣の友達が作ったもの（ラーメン）を合体させると，顔と髪の毛になったり
十人十色	4	人によってやり方は同じでも出来たものが違ったり，見立てているものも異なって／注目ポイントが違って
これまでの経験を生かす	2	昔遊んだ遊び方を徐々に思い出して，色々な遊び方を思いつく／新聞と今まで見てきたものが結びついて
身体によるモノとの対話	**21**	
新聞紙の性質への気づき	6	繊維の方向はある／くしゃくしゃにしてみると，やぶりやすい／枚数を変えると強さが変わる
新聞紙に触れ，その感触を頼りに	5	目的をもって触るのではなく／最初に触った感覚からこんな風にしようと／触ってみないとわからないこと
アフォーダンスを知覚	5	気づかないうちにアフォーダンスしている／新聞紙があると自由に触りたくなってしまうし，びりびりにしたくなってしまう／目の前に物があると手に取ってみたくなると思うし，何か形を作ったりしたくなる
五感を働かせる	5	破れる音が良い音だと思った／五感を使って匂いや触りごこち，音，あたたかさなど様々な感覚を使って
快の情動による遊びの駆動	**12**	
面白い・楽しい・気持ちいい	9	すごくおもしろかった／すごく楽しかった／気持ちいいことにも気づいた
自由な活動による解放感	3	自由に遊んでいいよと言われて遊ぶのが初めて／新聞紙でこんなに遊ぶことが普通ない
モノとしての新聞紙	**18**	
広がる多様性・可能性	8	１枚の新聞紙ですが，それぞれの発想や工夫によって楽しみ方は無限大／遊びを指示しない玩具の強みである
身近なモノへの捉え直し	8	実際に新聞を触ってみる前までは今までの経験から先入観がある状能／どんな身近なものでも遊ぶ用具になりうる／普段の些細な事にも遊びも隠れていることを指導者側が意識し，幼児と関わっていく必要がある
新聞紙１枚という制限	2	１枚という限られた枚数全てを丸めてしまうのはもったいない／限定する環境を作ることで工夫して
保育現場との架橋	**10**	
幼児の想像力・遊びの展開力への期待	5	ごっこ遊びや見立て遊びにも使えそう／幼児は私たちより発想が豊かだと思うので／子どもは想像力や思考力，表現力を高めながら／どこまでも変化していきそうだ
実際の幼児の姿を見てみたい	4	実際に新聞紙を使っている子どもを見てみたい／子どもたちが何に注目するのか／ちぎりにくそうにしたり，力の加減など手の感覚の発達を見るきっかけにもなる／子どもが新聞で，どのように遊ぶのか
幼児視点で捉える保育者の援助や環境再構成	2	先生が授業中に行っていたみたいに，あとから「ほしい人！」と聞くことも，子どもの気づきの上で大事／援助の仕方もきっと難しい…「かっこいい銃だね」と言うと違うものを作っていたのに…となる子もいるのか
学校教育と幼児教育との比較	**9**	
直接的・具体的な体験による学び	6	小学校では結果と理由を教えるけど，幼児は考える過程が大切だと学んだ／物の性質に気づくきっかけになる
正しい法則ではなく，自分なりの法則・探求	3	科学的に正しい法則を求めるわけではなく，自分なりに探求し楽しむことが大切だとわかった

２．ワークにおいて生起した行為及びモノの性質・仕組みへの気づき

ここでは，図３のグループを構成している語を確認し，その語が用いられているアンケート結果の自由記述の文面に立ち返りながら，ぞれぞれ相応しい概念を付与する。

(1) 繊維の異方性による破れ方の違い

グループ①は，「切る」「切れる」「真っ直ぐ」「縦」という４語で構成される。紙の繊維の異方性(向きによって性質が異なること)により，縦方向は真っ直ぐ破れやすく，横方向は真っ直ぐ破けにくいという内容と捉え，〖繊維の異方性による破れ方の違い〗とした。

(2) 薄さ・柔軟性に基づく成形の容易さ

グループ②は，「成形」「柔らかい」という２語で構成される。「丸める」「ねじる」「折る」等の行為をすることによる成形が容易であることを示していると捉え，〖薄さ・柔軟性に基づく成形の容易さ〗とした。

(3) 嗅覚による知覚

グループ③は，「匂い」「嗅ぐ」「紙」という３語で構成される。新聞紙の匂いを嗅ぎ，紙・インクなどの匂いを知覚（新聞紙への印象・評価を含む）していると捉え，〖嗅覚による知覚〗とした。

（4）張力＋打撃で綺麗に裂く

グループ④は「破れる」「引っ張る」「パンチ」「綺麗」「新聞紙」の５語で構成される。他者に引っ張ってもらい紙に張力を与えた状態で打撃すると直線に綺麗に破断するという意味であり，〖張力＋打撃で綺麗に裂く〗とした。

（5）シワの残留

グループ⑤は「シワ」「広げる」という２語で構成される。くしゃくしゃに丸める，折り紙のように折る等した後，広げたとしてもシワが残るという部分的な不可逆性への気づきであり，〖シワの残留〗とした。

（6）方向で変わる“紙の動き”

グループ⑥は「方向」「気づく」の２語で構成される。新聞紙の向きによって落下の具合の違いや操作のしやすさの違いなどの記述と捉え，〖方向で変わる“紙の動き”〗とした。

（7）圧縮によるサイズ縮小・強度化

グループ⑦は「丸める」「簡単」「戻る」「強い」「細長い」「固い」「くしゃくしゃ」「小さい」の８語が構成される。くしゃくしゃと丸める・細長くするといった体積・面積の縮小を伴う圧縮操作によって，紙が小さくなったり戻らなくなったり，強度が増したりという気づきと捉え，〖圧縮によるサイズ縮小・強度化〗とした。

（8）握って塊／穴が開く

グループ⑧は「ぐしゃぐしゃ」「握る」「形」「ボール」「変わる」「開ける」「穴」の７語で構成される。ぐしゃぐしゃと握ってボール等の塊を成形したり，指を刺して穴を開けたりなど，手先を使った具体的な行為とそれによる形状の変化を指すものと捉え，〖握って塊／穴が開く〗とした。

３．ワークによって学生はどのような気づきや感想をもったのか

次に，幼児教育専攻以外の学生の記述を元に，表１のラベルに沿って分析する。以下，カテゴリーごとに特徴を示す。

（1）遊びの特徴を身体で理解

【遊びの特徴を身体で理解】として，［遊びや目的の変化・連鎖］［他者との相互作用］［十人十色］［これまでの経験を生かす］が抽出された。［遊びや目的の変化・連鎖］は，新聞紙へのある操作（遊び）が性質への気づきや見立てを誘発し，そこから遊びの目的が連鎖的に変容していく過程を捉えた記述である。［他者との相互作用］は，他者の行為や他者の生成物としての新聞紙を見ることにより，模倣・合体・拡張など他者との相互作用を引き起こし，共同的に遊びが生成・変容していく記述である。［十人十色］は，同一条件下でも，注目点や操作の仕方，生成物が一人一人異なることを肯定的に捉えた記述である。［これまでの経験を生かす］とは，ワーク中に過去の経験・体験が想起され，それが新たな見立てや目的を導くことを示す記述である。

これらのことより，【遊びの特徴を身体で理解】は，行為を通しての気づき等により，目的が変化・再構成され，他者との相互作用の中で展開していくという遊びの特徴を幼児教育専攻以外の学生が身体的に理解したことが窺える。

（2）身体によるモノとの対話

【身体によるモノとの対話】として［新聞紙の性質への気づき］［新聞紙に触れ，その感触を頼りに］［アフォーダンスを知覚］［五感を働かせる］が抽出された。［新聞紙の性質への気づき］とは，触れる，裂く等の身体操作を

通して，新聞紙の可塑性や強度の変化，安全性などの性質への気づきが促される記述である。［新聞紙に触れ，その感触を頼りに］とは，目的や意図をあらかじめ設定せずにとにかく触れることにより何らかの気づきが生まれ次の操作を方向付ける等，感触を試す働きかけから遊びが立ち上がる過程の記述である。［アフォーダンスを知覚］とは，「目の前に物があると手に取ってしまいたくなる」「何か形を作ったりしたくなる」等，目の前のモノが提供する行為の可能性を自発的に知覚し，指示ではなく“誘い”に応じた操作が生じている，つまり新聞紙からのアフォーダンスを知覚している記述である。［五感を働かせる］は，音・手触り・温かさ・匂い・見たて等，聴覚や触覚や視覚，嗅覚などの多様な感覚受容が，次の操作の方向づけや，性質へ気づきを促したりする記述である。

以上のことより，【身体によるモノとの対話】は，大人のもつ先入観や固定概念を一旦隅に置き，五感に身を委ね，モノがもつ行為の可能性を知覚したりすることが，次の操作や性質の気づきを促すというモノとの出会い直しのプロセスとして体感されたことが窺われる。

（3）快の情動による遊びの駆動

【快の情動による遊びの駆動】として，［面白い・楽しい・気持ちいい］［自由な活動による解放感］が抽出された。［面白い・楽しい・気持ちいい］とは，本ワークに対するポジティブな情動の言語化であり，ワークへの積極的・主体的関与にも直結するものであろう。［自由な活動による解放感］は，活動の自由が明示され，指示・制限が最小限という，普段の授業では「普通ない」状況に由来する，解放的な快の情動が読み取れる記述である。

以上のことより，【快の情動による遊びの駆動】は，制約・指示が最小限の開放的条件下で，面白い・楽しい・気持ちいいと言う快の情動が学生の中に生起し，その快の情動によって駆動していくという遊びの特徴を体感していたことが窺える。

（4）モノとしての新聞紙

【モノとしての新聞紙】として，［広がる多様性・可能性］［身近なモノへの捉え直し］［新聞紙１枚という制限］が抽出された。［広がる多様性・可能性］とは，新聞紙が可塑性が高く，非指示的で多様な使い方・表現・気づきを誘発する可能性を秘めているという記述である。［身近なモノへの捉え直し］は，新聞紙のワークを通して，新聞紙はもちろん他の身近な素材に対しても先入観や固定概念を離れ，遊びの素材や教材として再定義することの重要性へと視点が拡張された記述である。［新聞紙１枚という制限］は，新聞紙１枚という物的な制限があることで，操作の工夫が促され新たな目的の生成につながることを示す記述である。

このように，【モノとしての新聞紙】は，多様な展開の可能性を秘めた新聞紙の特性にとどまらず，身近なモノへの再定義や物的制限の影響といった思考の拡張が生じたことが窺える。

（5）保育現場との架橋

【保育現場との架橋】として，［幼児の想像力・遊びの展開力への期待］［実際の幼児の姿を見てみたい］［幼児視点で捉える保育者の援助や環境再構成］が抽出された。［幼児の想像力・遊びの展開力への期待］とは，幼児の方が自分達よりも，想像力や発想が優れ，豊かな遊びの展開をしていく予想や期待を含んだ記述である。［実際の幼児の姿を見てみたい］とは，幼児の気持ちになってワークに取り組んだことで，実際の幼児が何に注目し，どのような操作をし，手先の発達(力加減)がどう表れるかを観察したいという志向の高まりを表す記述である。［幼児視点で捉える保育者の援助や環境再構成］は，保育者(ワーク内では筆者)の言葉がけや環境の再構成の効果や難しさの認識を幼児の視点になることで得られたという記述である。

このように，【保育現場との架橋】では，実際の幼児の姿に対する興味・関心や幼児に内在する力への予想・期待を高めたり，現場の保育実践へ思いを馳せる等，幼児教育への関心意欲が高まっていることが窺える。

（6）学校教育と幼児教育との比較

【学校教育と幼児教育との比較】として，［直接的・具体的な体験による学び］［正しい法則ではなく，自分なりの法則・探求］が抽出された。［直接的・具体的な体験による学び］とは，一般化された知識・結果及びその理由の説明等が優先されがちな学校教育に比べ，幼児教育は直接的・具体的な体験の過程を重視され，その中で性質

や仕組みへの気づきが生まれることを，ワークを体験することで理解したという記述である。［正しい法則ではなく，自分なりの法則・探求］とは，ワークによって「自分なりの法則性」が立ち上がった経験から，講義で提示された「自分なりの法則性に気付く過程の重要性」について体感したとする記述である。

このように，【学校教育と幼児教育との比較】では，学校教育では知識伝達や理論的教授に比重が置かれるのに対し，幼児教育では直接的・具体的な体験の中で探究する態度を育むことが重要であると体感を通して理解したことが窺える。

Ⅳ．総合考察

本研究では，領域「環境」の内容を受講する学生を対象に，モノとかかわる体験型のワークにおいて生起する行為及びモノの性質・仕組みへの気づきを明らかにし，その体験に基づく学びから導かれる教育的意義を検討することを目的とした。具体的には，学生のアンケート記述のうち，ワーク内容に関してはテキストマイニングにより分析し，気づき・感想に関しては質的データ分析法を参考に分析した。その結果，学生はワークにおいて生起した行為と気づいた性質・仕組みとして，①繊維の異方性による破れ方の違い②薄さ・柔軟性に基づく成形の容易さ③嗅覚による知覚④張力＋打撃で綺麗に裂く⑤シワの残留⑥方向で変わる“紙の動き”⑦圧縮によるサイズ縮小・強度化⑧握って塊／穴が開くという概念が抽出された。またワークの気づきや感想については，❶遊びの特徴を身体で理解❷身体によるモノとの対話❸快の情動による遊びの駆動❹モノとしての新聞紙❺保育現場との架橋❻学校教育と幼児教育との比較という大ラベルが検出された。以下，研究の目的に照らしてこれらから導かれることをまとめる。

１．体験型ワークにおける〈行為―性質・仕組みへの気づき〉−共起ネットワーク結果を踏まえて−

ここでは，体験型ワークにおける〈行為―性質・仕組みへの気づき〉について考える。

１つ目は，学生自身が自発的に行った行為と言語化された性質・仕組みが対として安定して表出した点である。例えば，「縦に裂く→真っ直ぐ破れる→横に裂く→破れにくい」のように，実際にやってみた行為とそれに対する素材の反応が気づきをもたらし，その気づきが次の行為につながるという幼児のモノとの相互作用のプロセスを学生が体感することができたことが分かった。

２つ目は，学生自身による「自分なりの法則」への気づきが立ち上がった点である。本ワークにおいても，異方性(新聞紙の向きによる差)や強度の変化，落下速度の違い，紙の非可逆性など，自らの行為を元に得られた素朴概念が抽出されている。これは科学的に裏付けられた正否の同定ではなく，遊びを通しての「幼児なりの規則性を見いだそうとする態度」そのものであろう。

以上のように，本ワークにおいて，幼児のモノに対する行為とその性質・仕組みへの気づきの結びつきと，自分なりの法則の立ち上がりについて学生が体感できたことが窺われた。

２．本ワークが幼児教育専攻以外の学生にもたらした学びの射程

次に，ワーク後の気づきや感想の自由記述の分析を元に，幼児教育専攻以外の学生にとっての本ワークの教育的意義について考える。

１つめは，幼児教育における学びのプロセスを身体的に理解できたことである。学校教育では，知識の伝達や教授的説明に比重が置かれる傾向があり，そこには正誤の同定や理由付けが学習の主舞台になりやすい。一方，幼児教育は幼児の情動の動きを原動力とし，ヒト・モノ・コトとの直接的・具体的な体験による自分なりの気づきを重視する。まさにこの幼児期の学びの骨格を学生が身体で経験する機会となった。理論的ではなく，身体的に味わえたという点において教育的意義があると考える。

２つめは，幼児教育への関心・志向が高まったことである。体験を通して学生は幼児の学びのプロセスを体感しただけではなく，保育現場における幼児の姿へ思いを馳せ，学校教育と幼児教育に言及していた。学校教育に携わる教員が幼児教育へ関心を高めることは，学校教育と幼児教育の連携・接続という観点から大きな意義がある。それだけではなく，学習の中核に据えられる「主体的・対話的で深い学び」の観点からみても，本ワークで得

た体験による学びは，就職後の各教科・領域の授業づくりに横断的に移送しうるものであろう。直接体験を起点に対話と内省で意味づけを深める授業設計は，小・中・高校特別支援を含むあらゆる教育現場において実践的価値をもたらすものであろう。

以上より，幼児教育専攻以外の学生にとっての本ワークは，幼児教育の学びを身体化して理解することと同時に，将来学校教員として就職した際の幼児教育との積極的な連携接続や，直接的体験を起点とした授業設計への活用などに生きるであろう幼児教育への関心と思考を喚起したという点において，教育的意義があると言える。

Ⅴ．本研究の課題と今後の展望

最後に本研究の課題について考える。本研究では理論講義の後にワークを実施したため，講義内容（例：アフォーダンス，領域「環境」の取扱い）が学生の着目点や語彙選択，気づきの表現様式に影響した可能性がある。結果として，〈行為―性質〉の結び付きや「自分なりの法則」の言語化が，体験由来の気づきだけでなく講義由来の概念枠に部分的に規定された懸念は否めない。また，今後の展望として講義の有無による学習様式の比較，保育者専攻の学生とそれ以外の学生による専攻差の比較などを行うことにより，教育効果の精密化を図っていきたい。

引用文献

Gibson, D. E. (2003)Developing the Professional Self-Concept:Role Model Construals in Early,Middle,and Late Career Stages. *Organization Science,14,(5),*591-610.

細井香・内海崎貴子・野尻裕子・栗原泰子(2007)「保育者養成課程学生の幼児期の遊び体験について」『川村学園女子大学研究紀要』第 18 号，(2)，121-132.

今井邦枝・山西加織(2015)「幼少期の遊び・生活体験と自然に対する意識との関係－保育者を志す学生を対象とした質問紙調査から－」『高崎健康福祉大学紀要』第 14 号，41-51.

加藤繁美(1993)「保育者と子どものいい関係－保育実践の教育学－」，ひとなる書房.

厚生労働省　保育士養成課程等検討会(2017)「保育士養成課程等の見直しについて～より実践力のある保育士の養成に向けて～（検討の整理)」
https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/houkokusyo_1.pdf（情報取得 2023／12／27)

文部科学省(2018)「幼稚園教育要領解説」，フレーベル館.

文部科学省　教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会(2017)「教職課程コアカリキュラム」
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf(情報取得 2025／8／30)

文部科学省　初等中等教育局幼児教育課(2025)「全国こども政策主管課長会議」
https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/b1ba8054-23a8-4ad2-94bb-d0f6e0a03c51/394a679b/20250314-councils-kodomoseisaku-syukankacho-b1ba8054-2700.pdf 情報取得 2025／9／14)

佐藤郁哉(2008)「質的データ分析法－原理・方法・実践－」，新曜社.

牛澤賢二(2018)「やってみようテキストマイニング：自由記述のアンケートに挑戦！」，朝倉書店.

渡部努・嶋崎博嗣(2004)「保育者の保育者効力感と心理社会的要因に対する過去の遊び経験の影響」『日本保育学会大会発表論文集』第 57 号,192-193.